

A-12 原発性肺癌の臨床的解析

長崎大学医学部 第Ⅱ内科

(吉村 康、籠手田恒敏、松本武典、森 信興
奥野一裕、中野正心、原 耕平、箆島四郎)

研究目的：近年肺癌が急速に増加していることは異論のないところであるが、その原因には一つには居住環境の影響も挙げられている。長崎地方の原発性肺癌の臨床的解析を行い、現況を報告したい。

方法：昭和35年より昭和45年までの11年間に、我々の教室に入院した原発性肺癌患者は197人であったが、今回対象とした症例は剖検例90例、手術例49例、生検19例の計158症例で、組織学的に診断のついた症例のみに限定し、喀痰細胞診、気管内擦過細胞診で診断のついた症例は一応除外した。158例中追跡不能だった症例が1例あった。

成績：原発性肺癌の年度別数は、昭和35年より昭和40年までは年間10人弱であったが、昭和41年以後には急激にその約3～4倍に増加した。性別は男性142例、女性46例で、男：女＝2.4：1であった。

年齢分布は30才台9%、40才台18%、50才台31%、60才台37%、70才台10%で、40才より69才までの症例が85%に達した。20才・30才台の若年者症例は7例あったが、男性2例、女性5例で性比は逆に1：2.5と女性に多い傾向にあった。

病期分類はⅠ期11.4%、Ⅱ期19.6%、Ⅲ期24.1%、Ⅳ期44.9%で、Ⅲ・Ⅳ期の進行症例は69%の多数を占めた。

病理組織型は、扁平上皮癌58例36.7%、腺癌60例38.0%（肺胞上皮癌2例を含む）、未分化癌40例25.3%（大細胞型27例17.1%、小細胞型13例8.2%）となっていた。組織型による性比は扁平上皮癌は男性47例、女性11例で4.3：1、腺癌は男性38例、女性21例で1.8：1、未分化癌は男性26例、女性14例で1.8：1であつて、腺癌と未分化癌の性比は同率であつたが、未分化癌のうちの細胞型は男性15例、女性1例でその性比は、1.4：1、小細胞型は男性11例、女性3例でその性比は3.7：1であつた。即ち、扁平上皮癌と未分化癌小細胞型が男性にかなり多くみられた。

訪医の動機は症状があつたもの131例、集検20例、他疾患診療中に発見されたものが7例あつた。初発症状は咳嗽58%、喀痰19%、胸背痛12%、発熱9%、全身倦怠感8%、血痰8%となっていた。入院時症状のうち、全身症状としては全身倦怠感46%、るいそう41%、食思不振38%等であつたが、呼吸器症状は咳嗽82%、喀痰56%、胸背痛64%、血痰30%、発熱28%、呼吸困難16%を占め、其他

の症状として、リンパ腺腫脹13%、嗄声9%、運動障害6%を占めた。上大静脈症候群を12例(7.6%)再発性肺炎を5例(3%)にみとめた。

胸部X線分類は肺門浸潤型5例(3%)、肺門腫瘍型43例(27%)、肺野浸潤型7例(4%)、肺野腫瘍型90例(57%)、胸膜型13例(8%)となつていた。胸膜型は右側10例、左側3例で、組織型は腺癌12例、未分化癌1例であつた。パンコースト型は5例あり、組織型は扁平上皮癌2例、腺癌2例、未分化癌1例であつた。初診時の随伴陰影としては、無気肺が56例(35%)、肺炎絨陰影19例(12%)、空洞21例(13%)、胸水36例(23%)に認められた。X線上空洞をみとめた症例の組織型は、扁平上皮癌13例8%、腺癌5例3%、未分化癌3例2%であつた。

治療法の内容は、手術例48例で全症例に対して30.4%を占め、放射線療法を行つた症例は、抗癌剤を併用した症例を含めて49例31%で、抗癌剤療法のみを行つたものは40例25%となつていた。また種々の理由で対症療法のみを行つた症例は22例13.9%であつた。

手術例48例の病期分類はⅠ期27%、Ⅱ期37%、Ⅲ期23%、Ⅳ期14%で、Ⅰ・Ⅱ期の症例が64%を占めた。(48例中根治手術例は21例で、全肺癌症例に対しては13.3%であつた)。手術症例はほぼ全例にM.M.C、放射線等による補助療法を行つたが、Ⅰ・Ⅱ期の手術例の3年生存率は約45%であつた。Ⅲ・Ⅳ期の手術例14例中の最長生存症例はⅣ期の腺癌例で、術后31カ月生存中である。

放射線療法ではコバルトと⁵⁹Fuの併用療用例が23あり、Ⅱ・Ⅲ期の症例では有効例が多く、Ⅳ期の症例でも、自他覚的所見の改善の点で有効だった症例が5例あつた。抗癌剤による治療では、単独療法は一般に重症例に行われており、有効例が少なかったが、しかし2剤併用した例でも有効例は少なかった。

病期別、組織型別、治療法別により、発症より死亡までの平均生存月数との関連をみると、早期に手術を行つたものが最も予后がよく、Ⅲ・Ⅳ期の症例では、放射線療法と抗癌剤併用による療法を行つたものが有効例が多かつた。

剖検90例の組織型は、扁平上皮癌37例、腺癌27例、未分化癌26例であつた。扁平上皮癌の転移順位は肺54%、肝38%、胸膜30%、骨27%、右腎24%、リンパ腺は肺門部65%、傍気管部44%、分岐部27%で、腺癌の転移順位は肺52%、胸膜52%、肝41%、骨37%、右腎30%、リンパ腺は肺門部56%、傍気管部33%、分岐部19%であり、未分化癌では肝38%、肺35%、胸膜31%、心内膜27%、大脳23%、リンパ腺は肺門部58%、傍気管部65%、分岐部12%となつていた。剖検例で解明しえた死因、其他の成績についても若干報告したい。